

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年8月2日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520622

研究課題名（和文） 言語間におけるライティング能力の双向性モデル：その応用と説明力

研究課題名（英文） A Model of Transferability of Writing Competence across Languages: Applicability and Explanatory Power

研究代表者

リナートキャロル（RINNERT CAROL）

広島市立大学名誉教授

研究者番号：20195390

研究成果の概要（和文）：

本研究は、過去の研究に基づき構築された「言語間のライティング能力双向性モデル」が多言語学習者によるテキスト構築を説明できるかどうかを検証した。ケース・スタディの方法を使い、母語を含む3カ国語による29篇の作文、思考発想法プロトコール、インタビューデータを収集し、分析した結果、このライティング・モデルの有効性を確認し、また多言語学習者が既習言語知識をテキスト構築プロセスに使うライティング方略も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study examined whether the writing model, “Transferability of writing competence across languages,” constructed based on findings of past studies, can explain the text construction of multilinguals writing in three languages. Adopting a case study approach, the study collected and analyzed 29 writing samples, and think-aloud and interview data. The results confirmed the validity of the writing model and clarified how multilingual writers combine strategies from different languages in the text construction process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学外国語教育

キーワード：多言語学習者、ライティング・モデル、マルチコンピテンス、議論文、テキスト特徴、ライティング知識、読み手意識、アカデミック・ライティング

1. 研究開始当初の背景

|

本研究は、過去7年間の研究を継続したものである。私たちの研究は、国際情報化コミュニケーションの時代に相応しいライティング・モデル構築を目指している。一つの言語で文章がうまく書ける人は、他の言語でも同様にうまく書くことができるであろうという直感に基づき、過去の研究では母語 (L1) と外国語 (L2)、特に、日本語と英語ライティングの関係を精査してきた。日本人大学生、院生、海外帰国子女、アメリカ人日本語学習者から小論文を収集、分析し、そして L1 と L2 によるライティング能力双方性モデルを構築、検証した。このモデルの中心は書き手であり、三つの主要素から構成されている。一つは書き手の蓄えている様々な知識 (例、言語に特有なテキストの特徴、文章の書き方、トピックや専門知識)、二つ目は書き手の意思決定とこの決定に影響を与える諸要因 (見方、価値観、動機の内的要因や読み手、課題、環境などの外的要因)、そして最後はアウトプットとしてのテキストである (頁6の図を参照)。このモデルでは、最初の二つの要素を考慮することによって、以下二つの事象が説明可能である: (1) 言語間でのテキスト特徴の転移、(2) 言語間で共有されるテキスト特徴と相違。過去の研究では日本語と英語の2言語に限定してきたが、多言語で話す・書く人が増えつつある時代に対応するため、本研究では3言語を使用する日本人と外国人を対象にこのライティング・モデルの応用性と説明力の可能性を追求しようと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は構築した言語間の双向性ライティング・モデルを使用し、二つの発展的ケースを説明できるどうかを検証するものである。一つは多言語の書き手 (母語を含め2つの外国語に堪能な人) が3つの言語で

それぞれどのようにテキストを構築するのか、テキスト構築を決める意思決定の諸要因はなにか。もう一つは、日本語と英語のライティング経験豊富な研究者はどのような読み手を意識し、それぞれの言語で論文を書くのかについて調べる。前者の目的の場合、本研究では多言語の書き手によるテキスト構築はプロダクトとプロセスの両面を含む。後者の場合は、諸要因の中でも読み手に焦点を絞り、読み手意識・期待感とアカデミック・ライティングとの関係を精査したいと考える。なお本研究でのライティング能力とは論理力やライティング知識に基づきテキストを構築する力を意味する。また本研究では L1 とは母語を指し、L2 と L3 は共に母語以外の外国語を意味するが、先に学習した言語を L2 と、それより後に学習した言語を L3 として定義した。

3. 研究の方法

今回の研究方法の特徴は少人数の参加者からデータを収集し、詳細に分析する質的なケース・スタディの方法を採用した。この方法を用いて、長期的および横断的研究を計4つ行った。以下サブ・スタディ毎に参加者と実際の収集データについて簡単に述べる。

(1) 研究のタイプと収集データ

Study ①

2年間半の長期研究。参加者は留学経験をもつ、英語、中国語に堪能な日本人大学生1名。日本語、英語、中国語の作文計5篇、ビデオデータ、詳細なインタビューデータ。

Study ②

横断的研究。3カ国語に堪能な外国人学生6名 (カナダ人1、フランス人1、中国人3、韓国人1) が参加。分析には、中国語、英語、日本語に堪能な3名のデータを選択。作文9篇、詳細なインタビューデータ。

Study ③

横断的研究。3カ国語に堪能な日本人学生5名（外国語が英語とスペイン語2名、英語とフランス語2名、英語と韓国語1名）が参加。作文15篇、および Think-aloud protocols（作文作成中に考えていることを口頭で表現する思考発想法）の文字化データ、詳細なインタビューデータ。

Study ④

参加者は大学研究者5名で、うち4名が日本人、1名がドイツ人（女性4、男性1）。専門分野は文学、社会学、歴史学、応用言語学、年齢は30～50代。詳細なインタビューと研究論文のテキスト分析。

(2) データ収集方法

作文収集に使用した課題は、前回の研究と同じ議論文のトピック2つ（「早期外国語教育の是非」と「老人と家族の同居の是非」）および新たに追加したトピック1つ（「言語専攻生の海外留学の是非」）の3つであり、賛成または反対の立場で意見を明確に述べる文章作成を求めた。参加者はまず外国語で2つの作文を書き、最後に母語で作成し、辞書使用は可能とした。作文作成が全て終了した時点でインタビューを行った。質問の内容は自分が書いた作文の文章構成や特徴、ライティング・プロセス、読み手意識などについてである。一方、研究者へのインタビューは一人につき6～8時間かけ、質問はアカデミック・ライティングについての知識や訓練、専門分野と論文の関係、言語と読み手の関係などに焦点を合せ、提出された論文をチェックしながらインタビューを行った。

(3) データ分析

テキスト分析には過去の研究と同じ方法を使用した。分析した特徴は以下である。①デ

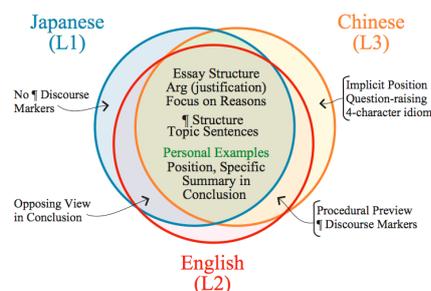
イスコース・タイプ(主に議論文と説明文)、②議論文のサブタイプ（提案型、論証型、探求型）、③反論を含む議論文の構成、④結論、⑤序論、⑥パラグラフ構成、⑦ディスコースマーカーの使用。一方、テキスト構築プロセスを調べるためには、書き手が作文作成中に行う活動を、6つの主カテゴリーに分け（評価、計画、修正、読返し、文の産出、メタコメント）、さらに「文の産出」にはサブカテゴリーとして8つもうけた（評価、計画、修正、読返し、リハーサル、翻訳、語彙サーチ、書く／話す）。思考発想法で収集したプロトコルの文字化データを上記のカテゴリーで分析し、母語や習得した外国語が文の産出プロセスにどのような役割を果たしているかについて調べた。

5. 研究の成果

(1) 言語間における共有テキスト特徴について

① 重複度

下の図は、Study①の日本人多言語学習者、Natsuによる、日本語（L1）、英語（L2）、中国語（L3）のテキストの特徴をまとめたものである（詳細は出版論文を参照）。中心部分の特徴は、3カ国語の小論文に共通に表れている。彼女はエッセイを全体として議論文の論証型（書き手が主張／立場の正当性を論理的に支持する）を選び、パラグラフは最初の文をトピックセンテンスで始め、



支持する理由を客観的な情報や個人的な経験に基づいて説明している。この特徴がどの言語にも使用されている一方、言語間の相違も観察される。中国語の小論文では、中国人の読み手を意識し、序論では質問を投げかけ、結論は四字熟語で終わっている。日本語論文では、段落間の関係を示す、「第一に」や「第二に」というディスコース・マーカーは使われていない。これは日本人の読み手に対して明確すぎるシグナルは必要ないと書き手が考えているからである。このようにコアの部分は大きいですが、言語間の違いも意識されながらテキストが構築されている。

Study②では、Natsu の場合と同じく、外国人多言語学習者の英語、中国語、日本語の作文にテキスト特徴の重複が大きいことが観察された。一人は3カ国語間の重複度はほぼ完全で、すべての小論文で論証型を使用していた。これはどの言語であれ意見を明確に主張するのは論証型が一番相応しいと学生は考えたからである。他の二人は、L2とL3で書いたテキストには大きな重複がみられたが、母語L1と他の言語の間の重複度は小さかった。

Study③の日本人多言語学習者の場合にも、上記と全く同じ傾向が見られた。5人中3人は3カ国語間のテキスト特徴の重複度が完全または相当大きく、他の2人は、外国語であるL2とL3の間は重複度が高いが、日本語であるL1との重複は少ない。以上の結果をまとめると、本研究の多言語学習者は、3カ国でほぼ同じ特徴のテキストを構築するグループと、L2とL3は同じであるが母語のL1では異なるテキストを構築グループと二つに分かれることが判明した。

②諸要因

書き手がテキストをどのように構築するかは、本ライティング・モデルにあるようにラ

イティング知識と意思決定に影響を及ぼす諸要因に寄るところが大きい。要因の影響は個人によって異なるが、言語間の違いに強い影響を与えるのは読み手意識であろう。

Study①のNatsuの場合にも読み手は強く意識されていたが、Study②のカナダ人の場合も同様である。中国語(L3)と日本語(L2)によるライティングは英語(L1)と異なると認識し、前者の2言語では英語とは別の探求型の議論文を使っている。本研究でも、過去の研究と同じような要因、ライティングの捉え方、トピックの影響、言語能力、英語能力検定試験の訓練のなどが影響することが分かった。

こうした諸要因の中で本研究結果と深く関係があると考えられるのは、ある特定の言語での集中的なライティングの訓練や経験の有無であろう。上記の多言語学習者9名のうち、5名が3言語でほぼ同様な特徴のあるテキストを構築していたが、彼らに共通するのは英語または日本語で集中的かつ長期にわたる書く訓練を受けていた事実である。5名中4名は留学を通して英語圏で英語ライティングを、1名はジャーナリストを目指し日本語で繰り返し訓練していた。彼らはこの経験を通して何語にも応用できるテキスト特徴のコアパターンを構築し、内在化していたのではないかと考えられる。一方、L2とL3の言語間だけにテキスト特徴が共有される多言語学習者の場合は、L3ではライティング経験が乏しく、L2のライティング知識をL3に転移しつつ(例えば、上記のカナダ人のケース)、母語であるL1の読み手のニーズに対応し、L1らしく書いたのではないかと推察される。

(2) 多言語学習者によるテキスト産出プロセスについて

テキスト特徴の選択とそれによるテキスト構築が作文のマクロレベルであれば、テキスト産出は一文ずつ文を作っていくマイクロレベルの活動である。このレベルでも学習者の母語と既習外国言はプロセスに影響を与えている。以下、Study③の日本人多言語学習者4人のプロセスデータの分析で明らかになった点を簡潔にいくつか挙げる。

①テキスト産出において異なる言語にかかわらず最も頻繁に使用されたカテゴリーは「文の産出」と「計画」（全体エッセイの計画／文レベルでの考えの創出を含む）である。一方、カテゴリーの総数（作文作成中の活動）は、母語のL1が一番少なく、次にL2、そしてL3と続く傾向にある。例えば、ある学習者は一文を作成するのに、母語では平均5.4回の活動、英語では9回、韓国語では12.6回と続き、言語能力が低くなるほどより多くのまた様々な活動（例、日本語への翻訳、語彙サーチ）が必要となる。

②L2やL3でテキストを産出する時、L1の使用は多くの学習者にとって必要となる。文の産出、計画、語彙サーチ、評価をする時にL1は頻繁に使用されたが、多言語学習者のライティング・プロセスには複数言語が同時に使用されるコード・ミキシングも頻繁に起きた。例えば、日本人の学生がフランス語（L3）の単語、「結論」を探す時、日本語と英語の両方を使ってサーチしている。

例 語彙サーチ：結論なんて言おう
...conclusion...En conclusion (L1->L2->L3)
これは多言語学習者が使える方略の一つであろう。

③他の共通ライティング方略としてパラグラフを書き出す前にまずは **First** や **On the other hand** というディスコース・マーカーを文頭に書くという方略が4名中3名に共通して観察された。この方略はパラグラフの内

容について書き手自ら方向付けをし、それから内容を具体的に考えるというものである。3人はどの言語の作文にも一貫してこの方略を使っている

（3）研究者の読み手意識とアカデミック・ライティング

テキスト構築に影響を与える大きな要因の1つとして、読み手意識／期待感が挙げられるが、Study ④では豊富な日英ライティング経験をもつ大学研究者5名にこの要因とアカデミック・ワークとの関係について詳細なインタビューを行った。以下は主な結果のみをまとめた。

①研究者は二つの読み手を意識している。一つは啓蒙書などを書く時に想定する一般的な読み手(non-specific audience)と同じ専門分野の研究者を対象にして論文まとめる時の読み手 (specific audience) である。

②前者の読み手を意識する場合、内容をできるだけ分かりやすく、読み手を引き込むために親しみやすいスタイル表現や質問の形を使用する。後者の場合は、できるだけ内容を明瞭にかつ論理的に首尾一貫性があるように心がける。特に序論では本論の内容について簡潔に述べる **preview** を使う。これらの特徴は日英語の区別なく同じように使われている。

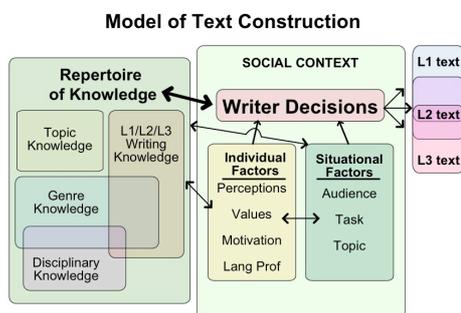
③読み手に関連し、言語の違いも意識されている。英語で書く場合は、主張をより明確に、パラグラフ間の関係を示すディスコース・マーカーの使用、トピック・センテンスを使ったパラグラフの構成、多種多様な語彙表現の使用など英語テキストの特徴を意識している。一方、日本語論文の場合は、読み手に押しつけないようにするため、「思われる」、「考えられる」などの緩和表現を文の最後に使用したり、質問スタイルを使う傾向がある。日英独の3カ国語で論文を書くドイツ人研

究者は、ドイツ語ではほとんど緩和表現を使わないが、英語ではある程度使い、日本語では緩和や質問スタイルを意識して使うようにしていると報告している。

以上、研究者は特定の言語の読み手を意識しているが、論文・啓蒙書におけるテキストの構築は言語の区別なくその目的に合わせて行われている。その際のテキストの特徴は言語間で共通している。

(4) ライティング能力双向性モデルの有効性と今後の課題について

本研究の研究結果から、「言語間ライティング能力双向性モデル」が多言語に堪能な書き手のテキスト構築を説明できるかことが確認された。また同時に多言語の書き手の長所として、異なる言語への読み手意識の高さや母語を含め既習言語を効果的に使うライティング方略をもつことが分かった



上記の図は、アウトプットに L3 を新たに付け加えたものである。今後はテキスト構築のプロセス部分をモデルにいかに組み入れていくかを課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. Kobayashi, H., & Rinnert, C. (2013). L1/L2/L3 text construction by multicompetent writers. *Applied Linguistics Association of Australia Annual Conference 2012: Refereed Proceedings* (pp. 28-67). Perth: School of Education, Curtin University (CD-ROM).

2. Kobayashi, H., & Rinnert, C. (2013). L1/L2/L3 writing development: Longitudinal case study of a Japanese multicompetent writer. *Journal of Second Language Writing*, 22, 4-33.

3. Reichelt, M., Lefkowitz, N., Rinnert, C., & Schultz J. M. (2012). Key issues in foreign language writing. *Foreign Language Annals*, 45(1), 22-41.

〔学会発表〕(計4件)

1. Kobayashi, H., & Rinnert, C. L1/L2/L3 Text Construction by Multicompetent Writers.

ALAA Conference, Perth, November 13, 2012.

2. Rinnert, C., & Kobayashi, H. L1/L2/L3 Text Construction by Multicompetent Writers in Chinese, English and Japanese. AILA, Beijing, August 24, 2011.

3. Kobayashi, H., & Rinnert, C. L1/L2/L3 Writing Development: Longitudinal Case Study of a Japanese Multicompetent Writer. Symposium on Second Language Writing, Taipei, June 11, 2011.

4. Kobayashi, H., & Rinnert, C. L1/L2 Argumentation Writing: Dynamic Repertoire of Writing Knowledge and Text Construction. Asia TEFL, Hanoi, August 8, 2010.

〔図書〕(計2件)

1. Rinnert, C., & Kobayashi, H. (To appear). Multicompetence and multilingual writing. In R. M. Manchón & P. K. Matsuda (Eds.), *Handbook of second and foreign language writing*. Berlin: De Gruyter Mouton.

2. Kobayashi, H., & Rinnert, C. (2012). Understanding L2 writing development from a multicompetence perspective: Dynamic repertoires of knowledge and text construction. In R. M. Manchón (Ed.), *L2 writing development: Multiple perspectives* (pp. 101-134). Berlin: De Gruyter Mouton.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

リナートキャロル (RINNERT CAROL)
 広島市立大学名誉教授
 研究者番号：20195390

(2) 研究分担者

小林 ひろ江 (KOBAYASHI HIROE)
 広島大学名誉教授
 研究者番号：50205481

(3) 連携研究者 なし